

研 究 実 績 書

研究テーマ	幕末・明治期における井上馨と伊藤博文の国家構想
研究の成果 (研究報告書(論文等)の要約・要点を簡潔にまとめて記入すること。)	<p>本研究では、幕末期から明治初期を通して、井上馨と伊藤博文が、19世紀の国際情勢のなかでどのような国家体制を必要としたのか、その国家構想を段階的に検討した。次の点を明らかにした。</p> <p>文久3年のイギリス密航留学段階では、過激な攘夷は国を滅ぼすことになり行うべきではないと悟ったこと。また、留学生の共通認識として、幕府に代わる天皇を中心とした国家体制を構想し、その実現のため王政復古を必要としたこと。</p> <p>慶応元年の内乱段階では、内乱を経て長州藩内が開国方針に一致したとして積極的に開国を進めようとしたこと。</p> <p>薩長連携段階では、薩摩藩と同様に、開国と天皇の権威回復による国家体制を必要としていたこと。</p> <p>慶応2年の幕長戦争段階では、幕府との戦争に備えて、長州藩とイギリスとの関係を築こうとしたこと。</p> <p>慶応3年の出兵協定段階では、武力討幕によって朝廷の権威を回復し、王政復古による天皇を中心とした国家体制を構想していたこと。</p> <p>明治元年段階では、将来的な国家体制として共和政治を構想していたこと。</p> <p>明治2年段階では、各藩に分かれた権力を集め、中央集権の国家体制を確立する必要性を主張したこと。</p> <p>本研究での検討は、明治初期までの国家構想となった。よって、今後の展望として、幕末・明治初期の国家構想に基づき、内閣成立後に伊藤は初代総理大臣として、井上は外務大臣としてどのような政治を行ったのか検討したい。</p>